

仕掛人はなんと日本人...グラミー賞「初の海外進出」、ピラミッド前での豪華イベントの「裏側」

2025年12月26日（金）16時59分

山田敏弘（国際ジャーナリスト）

シェア

ツイート

ブックマーク



ピラミッドの前で開催された「グラミー・ハウス・ギザ」の発表イベント

＜米国内でしか開催されてこなかった「グラミー・ハウス」が2026年、初めてエジプトで開かれることに。その仕掛人となった日本人「カナザワさん」とは？＞

2025年10月22日の夜、エジプトの誇るギザの3大ピラミッドを煌びやかなレーザービームが派手に照らした。

この日、世界でも最も有名な歴史遺産のひとつである大ピラミッドの目の前で、音楽界で最も権威あるグラミー賞をアメリカで主催してきた「レコーディング・アカデミー」の幹部ら総勢13名が集結し、壮大で派手なイベントが行われていた。

エジプトなどのエンターテインメントメディアが集結するなか、挨拶で舞台に立ったレコーディング・アカデミーのハーヴィー・メイソン・ジュニアCEOはこう宣言した。「ここで、来年10月、アメリカ国外で初めての『グラミー・ハウス』を開催する」

これまでロサンゼルスとニューヨークでしか開催されていないこのグラミー・ハウスは、グラミー賞とそれに付随して展開される一連のグラミー公式イベントのことだ。ハーヴィー・メイソン・ジュニアCEOは、エジプトでは「グラミー・ハウス・ギザ」と名付けられ「中東・アフリカ版グラミー賞イベント」となると話してくれた。大ピラミッドを舞台に、世界中からアーティスト、プロデューサー、エンジニア、業界のリーダーたちが結集する。

今回の発表イベントでも、エジプト出身で世界的な著名作曲家オマール・ハイラットや、エジプトで絶大な人気を誇るポップスターのキャロル・サマハがパフォーマンスを見せた。



ハーヴィー・メイソン・ジュニアCEOは舞台でこう語った。「この夜発表した来年のイベントは素晴らしいビジョンで、本当に驚くべきイベントになる。この実現に尽力してくれたカナザワさんに心から感謝を評したい」



インタビューに応じるレコーディング・アカデミーのハーヴィー・メイソン・ジュニアCEO

史上初の試みの仕掛人である日本人「カナザワさん」とは？

実はこの史上初の試みの仕掛人は日本人「カナザワさん」だ。東京に拠点を置く不動産投資会社タイタンキャピタルを率いる金澤幸緒がこの計画を立ち上げた。

タイタンキャピタルは、金澤が15年前に3名で資本金500万円で設立した会社である。今では日本で「小さな巨人」と言われる、その業界では誰もが知る会社となっている。企業理念は「企業は恐竜にならない」であり、これは、恐竜の様に大きくなってしまいつつ滅びてしまうため、そうならない様に「どんな局面でもスピーディーに舵を切ること」、「フットワーク軽く動いていくこと」を念頭に置いた企業理念となっている。

金澤とは、一体何者なのか。そもそも、この壮大なプロジェクトの始まりは、意外にもエンターテインメントではなく「水」の技術にあった。金澤は約10年前、日本の研究者が開発した「空気から水を作り出す技術（空水機）」の権利を取得。ローマ教皇が「21世紀は水を巡る争いの時代になる」と予言したことに感銘を受け、即座に投資を決断した案件だった。

この日本の技術が、ナイル川の水質や水量に課題を抱えるエジプト政府の目に留まる。エジプトは国家プロジェクトとして水問題の解決を模索しており、軍事産業省との合併で現地生産を開始することになった。この「水」を通じた信頼関係が、すべての土台になったわけだ。

信頼を得た金澤は、エジプト政府から首都移転計画（ニューキャピタル）などへの投資を打診され、現地視察を繰り返したという。その過程で、最近開館したばかりの大エジプト博物館（GEM）の隣接地（東京ドーム8個分）という一等地での開発の計画が決まる。



今回のイベントの仕掛人となった金澤幸緒

日本の国際協力機構（JICA）が大エジプト博物館の建設支援

「日本の国際協力機構（JICA）がGEMの建設支援を行っていた背景もあって、エジプト側も『日本企業に任せたい』という思いが背景にはあった」と、金澤は言う。この開発計画の総投資額は日本円にして約3000億円にも上る。

この広大なエリアのコンテンツとして浮上したのが「グラミー」の海外展開の話だった。2024年11月、「グラミーが世界展開を模索している」という情報をキャッチした金澤は、即座に行動を開始。1週間後には関係者と接触し、翌年2月にはロサンゼルスでグラミーを主催するレコーディング・アカデミーのCEOや幹部と直接面談した。音楽文化への敬意と、ピラミッド前という圧倒的なロケーションの価値を共有したグラミー側が事業計画に賛同し、半年後の10月には契約締結に至っている。

金澤は大学卒業後、システムエンジニア（SE）から不動産ビジネスに転向し、不動産事業家としての頭角を現す。現在では年間700億円規模の不動産投資を行う企業を率いる。不動産業界関係者によれば、「日本の不動産業界においては『レジェンド』として知られている人物だ」という。

金澤に話を聞くと、「ビジネス哲学の中核をなすのは『圧倒的なスピード』と『決断力』、そして『有言実行』だ。『Time is Money』と常に考え、普通なら数カ月かける決断をその場で行う」という。「エジプトの土地開発もレコーディング・アカデミーとの契約も、他者が躊躇している間に自ら現地へ飛び、トップと直談判して即決したことが成功の鍵だった」

さらに金澤は、「とにかく負けず嫌いだ。少し前に、チャリティオークションで大谷翔平のバットを競り落とせなかった時、悔しさのあまり次はいつか球団の共同オーナーになって、サインを100本でも書いてもらえる立場になると心に誓ったくらいだ」と笑う。そんな金澤をよく知る仲間も、「金澤さんは本物のサムライだ！」と話してくれた。



左からハーヴェイ・メイソン・ジュニア、金澤幸緒、レコーディング・アカデミーのプレジデントであるパノス・パナイ

ミュージカル「Boop! The Musical」の出資者の一人

富と社会貢献の関係に対する意識も高い。稼いだ富を積極的に社会に還元しているのだ。アフリカやアジアの貧困地域では、子供たちが泥水を飲むために何時間も歩き、命を落とす現状がある。そこで学校へ「空気から水を作り出す技術（空水機）」を寄贈。「美味しい水が飲めるから学校へ行く」という動機付けを行い、教育と健康の両面から子供たちを支援する草の根運動を展開しているという。

公的な支援に加え、個人的な寄付活動も精力的に行なっている。毎月3つの支援団体を通じて約100人の孤児や経済的に恵まれない子どもたちを経済的に支援している。子どもたちが20歳になるまで親代わりとして支え続けるという継続的なコミットメントだという。

さらにエンターテインメントにも造詣が深く、現在、グラミー・ハウス・ギザ以外にも、ハリウッドを巻き込んだ映画制作にも関わっている。漫画文化以外にも世界に誇れる日本の映画文化を世界に広げるべく、日本のコンテンツを用いてハリウッドに負けない大作を手掛けており、世界から注目を集めている。2025年春に開演したブロードウェイミュージカル「Boop! The Musical」の出資者の一人でもある。

金澤は「死んだ後に自伝は書けばいい、生きている間は成長し続けたい」と言う。常に未来を見据え、日々の努力を重ねて2030年のエジプト・ギザプロジェクト完遂に向け、公私の区別なく働き続けているという。ビジネスそのものを人生最大のエンターテインメントとして楽しんでいるようだ。

ピラミッドの前で引かれた華々しいパーティーの様子

